

「真実の宗教」 (三十二)

—— 私にとって報恩とは ——

櫟 暁 講 述

〈開式挨拶 三輪民子護持会副会長〉

皆様、お忙しい中、御出席下さいまして、有り難うございます。

今日は、浄土真宗の生みの親である、親鸞聖人の御恩徳に報謝し、七百五十年以上引き継がれ営まれます、大切な法要でございます。

光照寺第二十三回目の報恩講は、素晴らしいお天気に恵まれ、晴々とした心で皆様と御一緒にお勤め出来ますこと、お慶び申し上げます。

鹿児島から櫛先生をお迎えして、有意義なお話を伺います。先生は、初心者にも、ずっと聞法を続けてこられた方にもよくわかるお話をして下さいますので、ゆったりと心を開いてお聞き下さい。

報恩講のお勤めは、副住職より説明がございますので、それにあわせて、よろしくお願い致します。

簡単でございますが、開式の挨拶とさせて頂きます。

〈住職挨拶〉

皆様、ようこそ光照寺においての二十三回目の記念すべき報恩講にご参詣下さいまして、有り難うございます。

櫟先生のご紹介をさせていただく恒例のことなのですが、私がご紹介するまでもなく、櫟先生を皆さんはご存じのことだと思っておりますが、その前にですね、少し枕詞を入れながら、櫟先生のご紹介に入っていきたいと思うんですが、南側の土地、これを名付けて南側の聖地と、こういう呼称で呼んでおります。そこに親鸞聖人の銅像が立っておられるわけでございますが、ちょうど親鸞聖人の銅像の除幕式は、去年の十月十日、ちょうどオリンピックの行われた体育の日、今年は十四日になったとかいうのですけどね、まあ十月十日、非常に覚えやすい日が親鸞聖人の銅像が除幕された日でありました。ですから、ちょうど一年を過ぎたところでございます。

私も朝に晩に、親鸞聖人にお詫びをし、叱られにいかうと思つて日々を過ごしているのですけども、ご近所に、北川登さんという、今、そちらにおられるカメラを撮つておられる方が、ご近所にお住まいなのですが、私が朝起きて草をむしっている姿を見たと、先程云われましたが、なんで声を掛けてくれなかったのと、云いましたが、別に人目を忍んでね、草を取っていたんじゃないんですけどね。

親鸞聖人の銅像を建立して、聖地として名付けて、草茫茫々にしてはと思いつながら、芝生って難しいなと、ものすごく雑草の生命力は強いんでね、もう三日で伸びてきてしまうというようなことでありましたが、これからはまあそんなに伸びないんじゃないかと思うんですけどね。

ちよつとエピソードを申しますと、親鸞聖人の銅像の裏側がちよつと高台になっていて平になってるんですけど、そこがまあ今ですと、ねこじゃらし、大きくなつてんですけど、ある程度雑草を生やかしてるんですよ。

それで近所のおばさんが、「池田さん、こつち雑草伸びているけど大変だね。」と云われ、私は、「こつちは雑草ゾーンなんですよ。」って云つたらね、「雑草ゾーン？雑草のお部屋ね。」って云うから、「そうそう、雑草のお部屋なんです。」って、こんなような形の会話があつて、前の方は芝生とか玉砂利とかしながら、後ろは雑草ゾーンでありまして、けして雑草をみだりに伸ばしてんじゃない、微妙に難しいんですよ、雑草ゾーンはね。雑草を奇麗に刈つたらなんか砂漠みたいな、なんかね、索漠とするんじゃないかと。ある程度、雑草を伸ばしながら緑を保つ、これもまた難しい。芝生の雑草取るのも難しいけれど、雑草を適度に生やかしているのも難しいという、この南側の聖地はですね、そのような構成で芝生と雑草ゾーンの中に、親鸞聖人に立っていただいて、親鸞聖人の教えは、「群萌の教え」と云いまして、「群萌」と云うのは、雑草のことなんですよね。そういう教えもあるので、雑草ゾーンと云うのは、すべてが救われるという「群

萌の教え」と、いろいろ意味を重ねながら草を取っているという中に一年を過ぎたと、こういうことでございました。

門を開けて皆さんに近くに行つて見ていただくと思いましたが、時間もないし、遥拝つていつてね、遠くから拝するということもね、大事なものです。それこそ雨の日も、照る日も、風の日も、昼も、夜も、親鸞聖人が、只管立つておられるんでね、誠に申し訳ないなあいつも思うのです。阿弥陀様は休む時がないつて教えられていましたが、そうした中に、阿弥陀様とか、親鸞聖人の御膝元にいるとね、私は非常になまけていますなど、いつも思います。本当にそういう愚かな者なんですけれども、まあ、前置きはそんなことで、ちょうど一年経ちました。

そして、二十三回という回数を踏まして頂いて、櫛先生はじめ、皆さんにお配りした、『真実の宗教―私にとって報恩とは―』が、二十回目と書いてありますけれども、その前に、細川巖先生という方が、二回、報恩講をおつとめいただいたいて亡くなつていかれたのです。それから、櫛先生に報恩講を出講して頂き、前回は二十回目、今日が二十一回目と、合わせると二十三回と、こういうことなんですよね。

去年のこの報恩講の時は、先生はお元気だったんですよ。この報恩講が済んだ後、胆嚢の摘出手術をされた。これには驚きました。それで、今年の『真実の宗教』、これを読みながら、ああ、この話の後、櫛先生は胆嚢の摘出手術をされたんだということ、つくづく思いながら、また

改めて拝読させていただいたことでございました。

先生も九十歳というお歳を迎え、親鸞聖人は九十歳で亡くなれましたが、その九十というところにね、この御歳で胆嚢全摘ですからね。開腹して手術ですからね。大変な大手術であったわけであります。

小林さんから連絡がきて、これはどうしたらいいだろうかと思うだけで、小林さんとか櫟先生の息子さんのお電話で、先生が無事手術が成功されて自宅に戻られたとか、今、療養されているとか聞きながら、安堵していたわけですが、「親鸞聖人のみ教えに聞く会」を三回休講されて、九月の会座からまた先生が、先月です、来られて、そして、この十月は報恩講のご講師としておいでいただくと云うことになりました。手術後、九月、十月と、先生の元気なお姿を拝することができましたですね、本当に、鹿児島から出て東京に、伝えずは止まじと、こう来られる先生の願心が荘厳されて、この二十三回目の報恩講をお迎えできるということでもあります。一期一会というか、明日はないという中に、今、聞かざるならないという、こういうことを改めて思わされたことでございます。

先程、副住職が、蓮如上人の報恩講の『御俗姓』を拝読いたしました。櫟先生が以前、この『御俗姓』を意識されているんですね。それはあくまでも、ここにも書いてありますけれども、櫟先生の自らの御了解ということ、名訳なんですよ。もう今からどれくらいですかね、櫟先

生が真宗会館に来られて、教化教導されて、まもなくの報恩講の時の意識なんですよ。で、櫟先生はその前は、京都の教学研究所の所長をお勤めになつていて、その任務を果たされてから東京に来られて、教化教導となられ、まもなくの報恩講の時にどなたかが先生に、この『御俗姓』の意識をして下さいと云われ、先生が一気に書かれた。それが今回資料として載っていますが、副住職がおつとめするのと、櫟先生が意識されている御了解とあわせていただくと、やはりこの報恩講は、ほんとに「水入って垢おちず」というお言葉を、蓮如上人が云われていますけれども、櫟先生もそのへんを微妙に解釈されておられます。それはね、この報恩講の時に信心をとらずばという問題なんですよ。あとでというわけにはいかない。この二十三回目の光照寺の報恩講でね、如来より賜りたる信心を得てほしいと、こういうことでありますから、本当に真剣に聴聞させていたいただきたいと思うんですよね。私から云うまでもなく、櫟先生はもちろんそういう願心の中に身をおして、今日ここに来られているわけであります。

台風の前報が大変だった中に、先程お聞きしましたら、五日前に東京に来て、ずっと天気予報を注意して見ていたというお話の中に、今日は二つの台風が去つた中にです、すがすがしい報恩講を迎えることができたものですね。本当に有り難いと云われていました。櫟先生も飛行機が飛ばなかったらどうしようかと、心配されて来られたのです。本当にそういうこともあるものではないから、当たり前だつてことではないのでございますね、そういう中に、櫟先生をお迎

えして、二十三回目の報恩講が行われるということはありうべきことだと感謝申し上げます。先生宜しくお願い致します。下手な御挨拶で、先生、後でそのあたりのことを詳しく、その胆嚢の全摘というところに触れて頂いて、「生死一如」というところでお話頂ければ、誠にありがたいと、なんかプレッシャーをかけてしまったりして、御無礼申し上げました。ひとつ宜しくお願い致します。

〈資料一〉

浄土真宗（浄土真宗の意味）

〈浄土真宗〉という語は宗名でなく、真宗聖典では、次のような本質的な意味で用いられている。

（一） 真実の教え。阿弥陀仏の本願を説く『無量寿経』の教えのこと。（標列・教巻 化巻）

● 標列（二五〇―七十一）

大無量寿経 真実の教 ★浄土真宗

● 教巻（二五二―七三）

謹んで★浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

● 化巻（本）（三四五―七十五）

四依弘経の大士、三朝浄土の宗師、★真宗念仏を開きて濁世の邪偽を導く。三経の大綱、顕彰隠密の義ありといえども、信心を彰して能入とす。
（以上真実教）

◆ 私解 真実教は方便教（主として聖道門及び〈その他の哲学思想〉を含む）に対し、また一般世俗の邪義（名利愛欲追及 現世祈祷）に対す。

(二) 選択本願すなわち第十八願 (末燈鈔・高僧和讃)

● 末燈鈔 (六〇一—L九)

浄土宗のなかに真あり仮(ケ)あり、真というは選択本願なり、仮というは定散二善なり、選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。★浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

● 高僧和讃 (四九八—B二)

智慧光のちからより 本師源空あらわれて ★浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

(以上 浄土真宗の根源)

◆ 私解 選択本願は諸仏 諸菩薩の本願に対す。

(三) 念仏往生 (一念多念文意)

● 一念多念文意 (五四五—L十六)

浄土真宗のならひには念仏往生ともうすなり (浄土真宗の伝承)

◆ 私解 念仏往生は諸行往生(『観経』顕説)に対す。

(四) 信心往生の教え (唯信鈔文意)

● 唯信鈔文意 (五五二—L七)

眞実信心をうれば実報土にうまるとおしへたまへるを浄土眞宗の正意とすとしるべしとなり。

(浄土眞宗の本質)

◆私解 信心往生は単なる死後往生思想に対す。

(五) 他力 (血脈文集)

●親鸞聖人血脈文集(五九四―L三)

それ、★浄土眞宗のころは、往生の根機に他力あり、自力あり。(中略)(L六) 他力と申すことは、弥陀如来の御ちかいの中に、選択摂取したまえる第十八の念仏往生の本願を信樂するを、他力とは申すなり。如来の御ちかいなれば、「他力には義なきを義とす」と、聖人のおおせごとにてありき。

(他力の救済)

◆私解 他力は自力分別によつて人生の根本問題を解決しようとする努力に対す。

(六) 浄土成仏 (歎異抄)

●歎異抄(六三七―L一)

「★浄土眞宗には、今生に本願を信じて、かの土にしてさとりをばひらくとならうぞうぞうとこそ、故聖人のおおせにはそうらいしか。」

(他力の救済の因果)

◆私解 浄土成仏は人間の分別世界において悟りを開こうとする思想、言動に対す。

これらは、浄土門の真実の教え、浄土真宗の救済の原理、浄土真宗の根源、浄土真宗の伝承、浄土真宗の本質、他力の救済の因果を示しているのであって、宗祖親鸞においては〈浄土真宗〉（真宗または浄土宗）とは特定の宗派名ではなくて、阿弥陀仏の浄土に往生・成仏する道そのもの、その教えの本質的意味をあらわしている。そして宗祖親鸞は師の元祖法然に絶対随順していたから、宗祖親鸞の云う〈浄土真宗〉とは、元祖法然によって明らかにされた浄土往生・成仏を説く真実の教えなのである。

〈法話〉

只今ご紹介にあずかりました、櫛でございます。もう二十一回も法話を担当させて頂いておりますので、今更申し上げることもございませぬけれども、九州鹿児島教区、法泉寺の前住職でございます。

まず、報恩講という言葉の意味から申し上げたいと思います。今日流に云えば、報恩会というべきものでないかと思えます。講というのは、人の集まりを講と申しますので、その人の集まりの上に、何のために集まるのかと云つたら、それは報恩の為に集まる会であります。報恩とは何かと申しますと、親鸞聖人の教えのお蔭で、我々は浄土を願う自覚者にならせていただいた、有り難いことでございます、これからも命ある間ずっと聖人の教えを拝聴して、より深くこの信心を保ってまいりたいと思えますと、そういうことを心の内に深く抱いて、勤めさせていただくのだと、私は存じております。

それで、報恩講の淵源というか、どういふところで報恩講が起こってきたかということ、前からずっと考えましたが、実はこれは、法然上人が亡くなられたのが、親鸞聖人四〇歳の時であります。それは、この『聖典』をお持ちの方は、『年表』の一一三六頁を開けて頂きますと、下の段に、「建暦二年、親鸞聖人四〇歳、源空没。」法然上人がお亡くなりになったと。

一二二二 建曆二 四〇 源空歿。(八〇歳)

(『年表』一一三六頁)

その後二年位してから、親鸞聖人が常陸においでになった。そうして常陸の御門弟と一緒に、二五日の念仏という法要をお勤めになっておられたようです。二五日というのは、法然上人の御命日でありまして、二五日の念仏と申しておられたようであります。

ところが、親鸞聖人が京都にお帰りになって後、九〇歳で亡くなられるわけです。亡くなられた後に、関東の教団では、二五日の念仏に代わって、二八日の念仏という集いが行われてきた。これは、年表の一一三八頁、下の段の一番左側、弘長二年に親鸞聖人がお亡くなりになった。その後、関東では、二五日の念仏に代わって、二八日の念仏という集いはずっと行われてきたわけです。

一二六二 弘長二 九〇 親鸞、押小路南・万里小路東の住居で病臥、入滅。

(『年表』一一三八頁)

そして、この親鸞聖人のお墓といえますか、最初は墓標が一つ立っていたただけだそうではありませんが、そのお墓が留守職という、今の言葉で云ったら、留守番役と云いますか、ずっとお墓の護持を責任を持ってしておられた方が、親鸞聖人の末のお嬢さんである覚信尼公であります。

その覚信尼公のお子さんが覚恵法師、そのお子さんが覚如上人。親鸞聖人から申しますと、女の系統の曾孫になられます。その覚如上人が、留守識というのを辞めて、寺を建てて、別当職になられた。

別当職というのは、今日で言えば、代表役員ですね。これについては、関東の門弟が、留守職であるべきだと非常に反対をした。寺などを建てる必要はないのだ。別当職などもってのほかだ。というような議論もあったようですけれども、覚如上人はとにかく、本願寺という名の寺を造って、その寺は、報恩講を中心とする寺にするという決意が固くて、本願寺が出来上がるわけであります。その本願寺の中心が報恩講でありまして、本願寺教団はそういう意味で、報恩講教団だと云って差し支えないわけであります。

恩ということは、恵みということであります。恵みということは、単なる物質的な恵みとか、親の恩とかというのは違います。仏教の場合は、願恩と教恩という、二つに分けられると思います。

恩Ⅱ恵み

願恩

教恩

本願の御恩、願恩です。それから、本願の深い意味を教えてくださいいただいた教恩という、この二つになると思います。我々は、親鸞聖人の教えのお蔭で、本願ということ深く教えていただいたわけです。本願というのは、全ての人を平等にたすけたいという、如来の深いお慈悲である。そのお慈悲を身に受けておりながら、我々はそれを忘れている。こういう現実がある。

先程、蓮如上人のお話をご挨拶の中に出てまいりました。蓮如上人のお作りになりました『御文』によりますと、覚如上人が、報恩講を中心として本願寺を造られてから、蓮如上人の時には、もうすでに二〇〇年経って、その二〇〇年経った時には、すでに習俗化していた。習俗化とは、去年も報恩講を勤めたから、今年も勤めねばいけないというような、いわゆる行事的というか、習慣的に勤める、そういう傾向になってしまった。それではいけないということを、蓮如上人が『御俗姓』の中で仰っていただいているわけであります。

今日は、七五〇年以上経っております、この七五〇年以上経った今日も、我々は覚如上人が報恩講を始められた時の精神というものにいつも還って私たちは報恩の精神でもって、お勤めしなくてはならないと、私は思っておるわけです。その報恩とは、具体的にどうということかと云ったら、親鸞聖人の教えていただいた他力の信心という、精神生活で私たちが確実に親鸞聖人の教えのように他力の信心を得るということが、報恩なのです。

それで、皆さんと一緒にいつもお勤めしております『正信偈』は、親鸞聖人ご自身が、報恩の

心でお作りになったのです。この『聖典』を見て頂きますと、『正信偈』には、偈前の文というのがございまして、二〇三頁であります。

それ菩薩は仏に帰す。孝子の父母に帰し、忠臣の君后に帰して、動静己にあらず、出沒必ず由あるがごとし。恩を知りて徳を報ず、理宜しくまず啓すべし。

（『教行信証』『行卷』二〇三頁上―一二）

こうあります。菩薩、つまり、道を求めるものです。菩薩と云ったら、今日の言葉で云ったら、求道者です。我々は、教えによって、普通の人間が求道者にならせていただく、道を求める人間にさせていただく。単に、自分の五〇年乃至一〇〇年の一生を、欲望追及の一生で終わってしまわない。非常に消極的な云い方かもしれませんが、そういう一生で終わってしまわない。ちゃんと善知識の教えによって、道を求めて浄土を生きる人間にさせていただく。浄土というのは、光明の精神界です。闇の娑婆から光明の精神界に生まれ変わるといことが出来るような菩薩になる。菩薩とは、道を求める人になる。それが、報恩ということであります。

行事として、いつもと違ったお勤めをし、いつもと違ったお飾りをしてお勤めをすれば、それで報恩講は終わったというのではなくて、我々一人一人が、親鸞聖人の教えによって、道を求め、

信心をはっきりした求道者にならせていただく。そして生きている間、信心が深化していく。私は、深化という字を使いたいのです。

深化

深まっていく。もう私はわかった、これで終わり、何も云うことはない、そういうところに停止しないで、何も云うことはないのだけれど、その深い意味が、深まって領けていくというところに、私たちの一生の意味があると思うのです。

先程のご挨拶の中に、私の年齢のことが出てまいりましたが、九〇歳まで生きようと思つて生きたわけではないので、生きていたら九〇歳になつていたということですが、ただそれだったら身体も心も老化して、だんだん人様の世話になつて、最後は死んでしまうというようなことで終わってしまうのならば、虚しく過ぎるということなのです。

本願力にあいぬれば　むなしくすぐるひとぞなき

功德の宝海みちみちて　煩惱の濁水へだてなし

（『高僧和讃』四九〇頁下段―三）

『和讃』があります。『浄土論注』の「不虛作住持功德成就」というところがありまして、「本願力にあいぬれば むなしくすぐるひとぞなき」と空過、無意義に終わってしまう人はないのだ。つまり、教えを聞いて信心を得た人は、年と共に信心が深くなっていく。そして、命終わろうとする時に成仏する。南無阿弥陀仏になるということです。我々は、煩惱の凡夫でございます。『歎異抄』の中にございますとおり、「死なんずるやらんところばそくおぼゆる」と。

また浄土へいそぎまいりたきころのなくて、いささか所勞のこともあれば、死なんずるやらんところばそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。 (『歎異抄』六二九頁上—一六)

死ぬのではないかと、だんだん年を取ってまいりますと、もう長くは生きないと。もう数年か、数か月のうちに、命終わらなければならぬということをおぼゆるなら、非常に寂しい思いがする。心細い思いがする。そういうことを問題として、唯円大徳が、親鸞聖人にお尋ねをしたら、親鸞聖人ご自身も、自分もそういう心があったが、唯円さんも同じ心でしたかと云われる。「死なんずるやらんところばそくおぼゆることも、煩惱の所為なり。」。所為というのは、なせるわざということ。煩惱が身に満ちているから、その煩惱によって、もう死ぬのではないかと、恐ろしく、寂しく思うけれども、お念仏があると。南無阿弥陀仏があるから、南無阿弥陀仏の用はたらき

で、寂しく思い、悲しく思い、頼りなく思うような心が起こっても、それは、煩惱のなせるわざだということが、いつも納得ができて、その煩惱に振り回されない生活ができると。こういうことだと私は思います。煩惱が無くなりはしません。貪・瞋・痴という、三つが云われております。貪りの心、瞋りの心、愚痴の心、愚痴というのは、道理に暗い。

善導大師の「二河白道の喩」を拝見しますと、火の河は瞋りを表す。水の河は貪りを表す。その河の間にわずか四、五寸の、一二、三cmの幅の道が、西の方に通じているという喩です。その河の東の岸に立ったものが全く単独で、後ろから群賊が攻めてくる。横からは悪獣が攻めてくる。前に進もうとすれば、火の河、水の河に落ち込むというような状況で、恐ろしくて前にも横にも後ろにも進めず、どうすることもできなくなったと。それを三定死と申します。どっち向いても動けない状態になった時に、西岸上から呼びたもう声が聞こえた。東岸上から勧めたもう声が聞こえた。「汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。善導大師のこの「二河白道」の言葉が、『信巻』にほとんど全文出ております。『聖典』をお持ちの方は見ていただきます。

人ありて西に向かいて行かんと欲するに百千の里ならん、忽然として中路に二つの河あり。一つにはこれ火の河、南にあり。二つにはこれ水の河、北にあり。二河おのおの闊さ百歩、おのお

の深くして底なし、南北辺なし。正しく水火の中間に、一つの白道あり、闊さ四五寸許なるべし。この道、東の岸より西の岸に至るに、また長さ百歩、その水の波浪交わり過ぎて道を湿す。その火焰また来りて道を焼く。水火あい交わりて常にして休息なけん。この人すでに空曠の廻なる処に至るに、さらに人物なし。多く群賊悪獣ありて、この人の単独なるを見て、競い来りてこの人を殺さんと欲す。死を怖れて直ちに走りて西に向かうに、忽然としてこの大河を見て、すなわち自ら念言すらく、「この河、南北辺畔を見ず、中間に一つの白道を見る、きわめてこれ狭少なり。二つの岸、あい去ること近しといえども、何に由つてか行くべき。今日定んで死せんこと疑わず。正しく到り回らんと欲すれば、群賊悪獣漸漸に來り逼む。正しく南北に避り走らんと欲すれば、悪獣毒虫競い來りて我に向かう。正しく西に向かいて道を尋ねて去かんと欲すれば、また恐らくはこの水火の二河に墮せんことを。」時に当たりて惶怖すること、また言うべからず。すなわち自ら思念すらく、「我今回らばまた死せん、住まらばまた死せん、去かばまた死せん。一種として死を勉れざれば、我寧くこの道を尋ねて前に向こうて去かん。すでにこの道あり。必ず度すべし」と。この念を作す時、東の岸にたちまちに人の勧むる声を聞く。「仁者ただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん。もし住まらばすなわち死せん」と。また西の岸の上に人ありて喚うて言わく、「汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ」と。この人すでに此に遣わし彼に喚うを聞きて、すなわち自ら正しく身心に

当たりて、決定して道を尋ねて直ちに進みて、疑怯退心を生ぜずして、あるいは行くこと一分二分するに、東の岸の群賊等喚うて言わく、「仁者回り来れ。この道嶮悪なり。過ぐることを得じ。必ず死せんこと疑わず。我等すべて悪心あつてあい向うことなし」と。この人、喚う声を聞くといえどもまた回顧ず。一心に直ちに進みて道を念じて行けば、須臾にすなわち西の岸に到りて永く諸難を離る。善友あい見て慶樂すること已むことなからんがごとし。これはこれ喩なり。次に喩を合せば、「東岸」というは、すなわちこの娑婆の火宅に喩うるなり。「西岸」というは、すなわち極樂宝国に喩うるなり。「群賊悪獣詐り親む」というは、すなわち衆生の六根・六識・六塵・五陰・四大に喩うるなり。「無人空迴の沢」というは、すなわち常に悪友に随いて、眞の善知識に値わざるに喩うるなり。「水火二河」というは、すなわち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしと喩うるなり。「中間の白道四五寸」というは、すなわち衆生の貪瞋煩惱の中に、よく清淨願往生の心を生ぜしむるに喩うるなり。いまし貪瞋強きによるがゆえに、すなわち水火のごとしと喩う。善心微なるがゆえに、白道のごとしと喩う。また「水波常に道を湿す」とは、すなわち愛心常に起こりてよく善心を染汚するに喩うるなり。また「火焰常に道を焼く」とは、すなわち瞋嫌の心よく功德の法財を焼くに喩うるなり。「人、道の上を行いて直ちに西に向かう」というは、すなわちもろもろの行業を回して直ちに西方に向かうに喩うるなり。「東の岸に人の声勧め遣わすを聞きて、道を尋ねて直ちに西に進む」というは、すなわち釈迦すでに滅したまひ

て後の人、見たてまつらず、なお教法ありて尋ぬべきに喩う、すなわちこれを声のごとしと喩うるなり。「あるいは行くこと一分二分するに、群賊等喚び回す」というは、すなわち別解・別行・悪見の人等、妄に説くに見解をもつて、迭いにあい惑乱し、および自ら罪を造りて退失すと喩うるなり。「西の岸の上に人ありて喚う」というは、すなわち弥陀の願意に喩うるなり。「須臾に西の岸に到りて善友あい見て喜ぶ」というは、すなわち衆生久しく生死に沈みて、曠劫より輪回し迷倒して、自ら纏うて解脱に由なし、仰いで釈迦発遣して指えて西方に向かえたまうことを蒙り、また弥陀の悲心招喚したまうに籍つて、今二尊の意に信順して、水火二河を顧みず、念念に遺ることなく、かの願力の道に乗じて、捨命已後かの国に生まるることを得て、仏とあい見て慶喜すること何ぞ極まらんと喩うるなり。また一切の行者、行住座臥に、三業の所修、昼夜時節を問うことなく、常にこの解を作し常にこの想を作すがゆえに、「回向発願心」と名づく。また「回向」というは、かの国に生じ已りて、還りて大悲を起こして、生死に回入して、衆生を教化する、また回向と名づくるなり。三心すでに具すれば行として成ぜざるなし、願行すでに成じてもし生まれずは、この処あることなしとなり。またこの三心、また定善の義を通撰すと。知るべし、と。已上

（『教行信証』『信巻』二一九頁し—五〇二二頁し—一五）

もうどつちに行つても死ぬのならば、自分は死を覚悟して前に進もうという決心が出来た時に、

「東の岸にたちまち人の勤る声を聞く。『仁者ただ決定してこの道を尋ねて行け、必ず死の難なけん。もし住まらばすなわち死せん』と。また西の岸の上に人ありて喚うて言わく、『汝一心に正念にして直ちに來れ、我よく汝を護らん。すべて水火の難に墮せんことを畏れざれ』と。」(二二〇頁L—二)、こういう声が東と西から聞こえてきたと、こういう喩でございます。その後、「『水火二河』というは、すなわち衆生の貪愛は水のごとし、瞋憎は火のごとしと喩うるなり。『中間の白道四五寸』というは、すなわち衆生の貪瞋煩惱の中に、よく清淨願往生の心を生ぜしむるに喩うるなり。」(二二〇頁L—一三)。

貪、瞋、煩惱が、貪りや瞋りの心が無くなるわけではありません。けれども、貪りや瞋りの心の中に、淨土に往生したいという願いが起こる。それは二尊の、つまり、阿弥陀如来と釈尊のお用はたらきによって、自分の上にそういう精神の轉換ができるのだと、善導大師が云っておられるわけです。親鸞聖人は非常にこのことを大事にされて、『信卷』にほとんど全文を引用しておられるわけであります。今日は、「二河白道」の話をするつもりで來たわけではありませんので、このへんにしておきます。

それで、親鸞聖人が淨土真宗を立教開宗された。これは常識的に、法然上人は淨土宗を立教開宗された。『御和讃』の中にもそう書いてあります。

智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

（『高僧和讃』四九八頁中段―二）

「浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう」という、これは浄土真宗を立教開宗された人は法然上人だと、こう具合に親鸞聖人は云っておられる。けれども、法然上人が一生涯かかって仰っていたけなかつた、その深い浄土の教えの真まことの宗むねです。

「まことのそこ」という言葉が、親鸞聖人のお手紙の中にあります。

なにごとよりは、聖教のおしえをもしらず、また、浄土宗のまことのそこをもしらずして、不可思議の放逸無慚のものなかに、悪はおもうさまにふるまうべしと、おおせられそうなるこそ、かえすがえす、あるべくもそうらわず。

（『親鸞聖人御消息集（広本）』五六六頁し―四）

真まことの底そこというのは、真の宗。一番大事なところと、こういう意味ですね。平たい喩で云いましたら、お砂糖を溶かして砂糖水を作ると、しばらくすると、砂糖が沈殿して下に溜まってしまふ。上の方はちよっと甘いけれども、あまりたいしたことはない。下の方は物凄く甘いというような

ことがあるでしょう。真まことの底そこというのは、そういう喩よです。この教えの一番大事なところを顕あかにしなければならぬ。それは、法然上人が云おうとして、云うことが出来なかったその大事なところを、親鸞聖人が『選択本願念仏集』の精神として顕あかにしていかなくてはいけないというお心で、『教行信証』をお作りになった。

『教行信証』というのは、『顕浄土真実教行証文類』という長い名前なのです。それを『教行信証』と普通に云っているわけですが、その『教行信証』をどう読むのかと申しますと、それは、浄土を顕あす真実の教行証文類、こう読みますとよくわかると私は思います。

六巻の聖教は何を顕あしていられるかと云いますと、浄土という光明の精神界をはつきりと顕あすという意味で、この法然上人の云おうとして云われなかったことを顕あらかにするのが、これが『教行信証』という親鸞聖人の主著であり、この『教行信証』という主著が出来上がったということが、実は、浄土真宗の立教開宗ということなのです。浄土真宗が開かれたということは、『教行信証』が出来上がったということだと、こう私は思うのであります。

今日は皆様方に「浄土真宗法話資料」を見て頂いております。これは、今年の四月六日に作ったものであります。浄土真宗といったら、宗派の名前だと思っっている人がほとんど大部分です。それは近いところでは浄土宗。聖道門で云うならば、法相宗、天台宗。禅系統では、臨濟宗、曹

洞宗。それから高野山の真言宗と、その他たくさん宗がありますが、その一つとして浄土真宗があるのだという具合に、了解している人がほとんどです。それで、西本願寺さんの方では、浄土真宗本願寺派とこう云っておられる。そういうことがあるから、なおさら浄土真宗というのが宗派の名前のように多くに人は思っておりますが、それは違うということを、私は云いたい。

〈浄土真宗〉という語は本来宗派名ではなく、真宗聖典では次のような本質的な意味で用いられている。

本当の意味はどういうことか。

(一) 真実の教え。阿弥陀如来の本願を説く無量寿経の教えのこと。

『大無量寿経』上下二巻というのは、これは本願を説き、本願の救いを説いておられる真実の教えである。それには二種の回向ということがあるのだということを、『教巻』の一五二頁三行目に、

謹んで浄土真宗を案ずるに、二種の回向あり。一つには往相、二つには還相なり。往相の回向について、真実の教行信証あり。それ、真実の教を顕さば、すなわち『大無量寿経』これなり。

（『教行信証』『教巻』一五二頁L—三）

ということは、お経はたくさんあるが、『大無量寿経』以外の教えは、みな方便の教えである。『大無量寿経』の本願の教えに我々を帰入させるために、釈尊が苦勞してたくさんのお説いて下さった。聖道権化の方便ということがあります。権化というのは、方便ということです。

こういう話を私は聞いたことがあります。曾我先生の随行をずっとされていた福岡県出身の藤代聰磨先生が、どこかで先生に付いてタクシーに乗られた。そうしたら、タクシーの運転手さんが創価学会の方で、真宗の偉い先生とその随行だということを知らないものだから、お二人に向かつて、「創価学会が本当の教えです。日蓮上人の法華経を中心とする創価学会の教えが本当の教えであつて、真宗なんていうのは小学生みたいな、小学校の一年生ぐらいのような教えであつて、あれはもう方便の方便、一番低い方便の教えです。」ということ云われたそうです。普通の人ならそれに対論するのですね。それはそうでない、と云うのですが、曾我先生はじつと聞いておられた。タクシーを降りられる時に、「あなたの仰るとおり方便ですが、方便なりが違います。無上の方便です。」と、こう云われた。こういう話が藤代先生から伝わっていると聞きまし

た。無上の方便。このこと一つで、すべての人が往生成仏できる、この上もない大きな用きはたらをし
てくださるのが浄土真宗。それは、「本願を信じ念仏申せば仏になる。」という一言です。『歎異
抄』にそう出ております。

他力真実のむねをあかせるもろもろの聖教は、本願を信じ、念仏をもうさば仏になる。

(『歎異抄』六三一頁七一―九)

我々は、一体何を目標にして生きていくかということ。結局、名を残すということを目指
に生きていくという答えが多いのです。「虎は死して皮を留め、人は死して名を残す。」人は死
して名を残す。この世に名を残すというつもりで、一生懸命、私の身体は一〇〇年内外のことだ
から、身体を永遠に残すわけにいかないから、あの人は一生の間にこういう素晴らしい、人には
できないことをしていたのだというような具合にして、政治家は政治家、芸術家は芸術家、ある
いは、学者は学者として、名を残す。スポーツマンなら、金メダルと取った素晴らしい人だとい
うように名を残す。そういうことを目標にして生きていくという答えが、普通常識的な答えです。
しかし、名を残せる人というのは、ほんのわずかなのです。

私は、記憶力が鈍いものですから、電子辞典を持って歩いているのです。解らないことがあれ

ばこれで引くのです。この中で個人の名前を引いてもわずかなものです。わずかな政治家とか、芸術家とか、学者の名前は出てまいります。けれどもこれは、ほとんどわずかなものです。一般の人は亡くなって、親類の人とか、あるいは友達の人が、しばらく覚えていてくれるという程度のことです。ほとんど名が無くなってしまふ。

ところが、そんなことは問題でないというのが、真宗の教えです。我々は、本願を信じ念仏申す身にさせていたいただいたら、皆、南無阿弥陀仏になるのだと。命終わったら、南無阿弥陀仏になるのだと。そして、すべての人を救う用きはたらをさせてもらう。これが還相回向です。

還相回向というのは、中国の曇鸞大師が云い出されたことなのですが、親鸞聖人は非常に大事にされて、我々が浄土に生まれるということだけで、自分一人がもうこれでたすかったのだといって、そこでもう終わってしまうとか、寝込んでしまうのではなくて、浄土に生まれた人は必ず浄土から還って、浄土を知らない人、浄土に生まれる道ということを知らない人に勧めて浄土に生まれる人になってもらうということ、そのことが還相回向はたら、その用きはたらをさせてもらう。それは永遠なる用きはたら。我々の人生は、わずか五〇年から一〇〇年の間ですけれど、還相回向はたらという用きはたらは永遠に続いていく。つまり、阿弥陀如来のお用きはたらを我々がさせてもらえらるというような、そういうことをはつきりされた方が、親鸞聖人です。

私たちが本山にお参りする。七五〇回忌なら七五〇回、毎年の報恩講にお参りをする。門に真

宗本廟と書いてあるでしょう。本廟とは日本語で言えば、御靈屋みたまやということですね。親鸞聖人の御精神がここにおられる。お姿は亡くなられたけれども、親鸞聖人の御精神、つまり浄土真宗という、この教えの精神というものが、この本願寺の本廟の中にちゃんと御靈屋みたまやとして納まっているのだということで、本願寺というお寺を本山として、我々は仰いでいるわけです。それは、ただの本山というのとは違うのです。その親鸞聖人の御靈屋みたまやに、我々がお参りをして、そして、聖人の勧められた他力の信心を一人一人が頂いて、我々が亡くなくても滅びないところの、終わらないところの精神生活をさせて頂くということが、はつきりするということです。これが私は、報恩ということの具体化だと思っております。

それで、少し前に申し上げましたことを、もう一度繰り返してみますと、皆さん、『正信偈』を毎日お勤めするでしょう。お勤めをするのは、『正信偈』です。ただというようなことで、習慣になっっているようなことが多いのですが、実は、『正信偈』を作られた親鸞聖人は、阿弥陀如来と七高僧の教えの御恩というものを深く感じて、そして『正信偈』をお作りになられた。「唯可信斯高僧説」。唯この高僧の説を信ずべし。高僧の説というのは、ここに書いておりますように、『大無量寿経』の救いということを、各時代で身を以て顕して下さったのが七高僧。その高僧の説を深く信ずべしということと終わっている。「帰命無量寿如来」から始まって、「唯可信斯高僧説」で終わっているこの『正信偈』をお勤めするということは、忘れていた仏の御恩とい

うものを、いつもお勤めをすることによって、自分の精神生活の中心として、はつきりさせてもらうということだと、私は思っているわけです。

この第一番目の「大無量寿経 真実の教 浄土真宗」ということについて、『正信偈』は、『大無量寿経』の讃歌である。『浄土論』は、『三部経』の讃歌であるけれども、『正信偈』は、『大無量寿経』の讃歌である。本願の御法を、この六〇行一二〇句の『正信偈』で以て顕かに示して下さったものであるということをまず申し上げて、第一席目にしたわけでございます。

〈休憩〉

この資料を見て頂きます。(二)として、選択本願すなわち第十八願、これは親鸞聖人のお手紙、『末燈鈔』とか、あるいは、『高僧和讃』に述べられているわけです。

浄土宗のなかに、真あり仮あり。真というのは、選択本願なり。仮というのは、定散二善なり。選択本願は浄土真宗なり。定散二善は方便仮門なり。浄土真宗は大乗のなかの至極なり。

(『末燈鈔』六〇一頁七―九)

難しい言葉がずっと続いております。それから、

智慧光のちからより 本師源空あらわれて 浄土真宗をひらきつつ 選択本願のべたまう

(『高僧和讃』四九八頁中段―二)

私解としまして、選択本願は諸仏・諸菩薩の本願に対す。ということですが、選択せんたくというのは、選択せんたくという普通の我々が使っております選択せんたくという、選ぶせんたくということと同じ字であ

ります。浄土真宗では、「せんじゃく」と濁って読みます。浄土宗では、「せんちゃく」と濁らないで読みます。どういうわけか私はよくわかりませんが、選択せんじやくということは、仏の智慧で選び取るということです。我々が選択せんたくするというのは、自分の都合で、自分はこれが良からうと思つて選択せんたくする。今日の時代は、ものが町に溢れていて、自分の好みに応じ、自分の要求に応じたものを、自分で選んで買うというのが普通になっております。

ところが、我々の精神生活というのは、何を選んで精神生活をするかという、そういう問題です。それはものを選ぶようにはいかないでしよう。

一番大きな問題は、民族信仰です。民族信仰というのは、日本で云う神道ですね。私は三重県の生まれですが、伊勢神宮は、今年新しい造作が出来て、式年遷宮が行われ、二〇年に一遍、新しい本殿が出来上がって、そこへ御神体を移す。テレビでご覧になったと思います。伊勢神宮が大体、日本の国家神道の中心になっております。

だけど、そこには先祖神というだけのことであつて、救済ということがありません。祈祷といふことがあつても、救済といふことはありません。私は、この頃伊勢神宮がどうなっているのか、二、三年前に一遍、ちよつと行ったことがあります。社務所に行つたら、安産のお守りはいくら、何のお守りはいくらと、札がかかつております。祈祷といふことがあつても、救済といふことではないのです。ところがやはり、民族信仰というのが、非常に根が深いのです。

我々は敬けい神しん崇すう祖そということことで教おしえられていいるでししょう。神かみを敬うやまつい、祖そ先せんを敬うやまつう。これは日本にっぽん国民たみとして大だい事じなこことだと教おしえられていいる。私わたしなど戦いくさ中ちゆう派ぱですから、そそういいう教おし育いくを受うけてきた。ところがこれこれはももう、外がい国こくに行いつたら通つう用ようしなないのです。隣りんの韓かん国こくに行いつても、中ちゆう国こくに行いつても、日本にっぽんの神かみ道だうなんなんていいうのは、戦いくさ争そうを奨しょう励れきするよような宗しゆう教こウだといいうこことで、非ひ常じょうに嫌きら悪あくしていいる。伊い勢せい神かみ宮みやではあありまませんけれれども、靖せい国こく神かみ社しゃに首くび相さうが参まゐるといいうこことに對たいして、非ひ常じょうに批ひ判ぱん的てきでああります。

そそういいう民たみ族ぞく宗しゆう教こウと浄じやう土ど真しん宗そうは違ちがう。民たみ族ぞくの如ごとくを問とわわず、性せい別べつの如ごとくを問とわわず、『歎たん異い抄しやう』第だい一いち条じョウに示しされれておおりまますよように、「老らう少しやう善ぜん惡あくののひひとをええららばばれれず」(六ろく二に六ろく頁げい一いち八はち)、これこれはななにも老らう少しやう善ぜん惡あくだだけででななくて、民たみ族ぞくの如ごとくを問とわわず、男おとこ女めづの如ごとくを問とわわず、一いっ切せつの差さ別べつは全ぜんく必要ひつやうない。絶ぜつ对たい平へい等とうの救きゆういいとといいうののが、これこれが本ほん願がんの救きゆういいである。他た力りきとといいうのは本ほん願がん力りきです。『行ぎやう卷まき』に、「他た力りきとといいうは、如ごとくの本ほん願がん力りきなり。」とああります。とこところが、この他た力りきとといいうのは、非ひ常じょうに誤ご解かいをさされておおりままして、他たの力りきを借かりりるといいうよような意い味みで、未みだだに使つかつていいる人ひとががいいます。他た力りきとといいうのは、如ごとくの本ほん願がん力りきであるといいうこことを、我われ々々ははははつつききりりささせて頂たまぐ。全ぜんての人ひとを本ほん願がんによよつて救きゆういい尽じんくくししたいいとといいう、そそういいう法ほウ蔵ざう菩ぼ薩さつのの大だいききななおお力りきが、この本ほん願がん力りきとといいうはたらいておおらられる。つつままり、因いんは本ほん願がんであり、果くわは仏ぶつ力りきである。因いん果くわを合あわわせて、本ほん願がん力りきとといいうう云いつておおらられるわけです。ちちよよつつととこの『聖せい典てん』をを見みて頂たまきます。『行ぎやう卷まき』の終しゆうりの方です。

他力と言うは、如来の本願力なり。

『論』（論註）に曰わく、「本願力」と言うは、大菩薩、法身の中にして常に三昧にましまして、種種の身・種種の神通・種種の説法を現じたまうことを示す。みな本願力より起こるをもつてなり。

（『教行信証』『行巻』一九三頁七一六）

こういう言葉がございまして、この自然じねんの力。計らわれない自然じねんの力。先程申しますように、覚如上人が留守職を辞めて、別当職になられるということ、その時の寺の名を本願寺とすると自分で決められた。それに対して、関東の門弟は非常に反対して、あくまでも留守職であつてもらいたいと云つたのですが、覚如上人はそれを否定されて、本願寺を建てて、別当職、代表役員になられた。

そして、報恩講を勤めるについて、『報恩講私記』というものをお作りになられた。『聖典』をお持ちの方は今申し上げますので、見て頂きたいです。私記とは、私の記と書いてあるが、実は、お式文。報恩講の時に、儀式を勤める意味を述べられたところの御文であります。どういふわけか、私の記となっているわけでありませうけれども、『報恩講私記』の中に、親鸞聖人のお徳というものを、三つに分けて述べられているわけであります。これは七三八頁、『報恩講私記（式

文』とあります。これはどういうわけで、私の記となつていいのか、私はよくわかりませんが、普通はお式文として、皆、覚えておくことではありますが、その七三八頁の後ろから五行、

一つには真宗興行の徳を讃じ、二つには本願相應の徳を嘆じ、三つには滅後利益の徳を述す。

(『報恩講私記(式文)』L—1—1)

この三つを挙げておられます。親鸞聖人のお徳というのは何かと云いますと、浄土真宗を開かれた。これが第一の徳です。浄土宗の真の意味、真の底まじとを顕あきかにするという意味で、『教行信証』を著作されたということが、浄土真宗の立教開宗である。これは、法然上人に背いて、浄土真宗を立教開宗されたわけではないのです。法然上人の浄土宗の真の意義を顕あきかにするために、浄土真宗を立教開宗された。背師はいし自立じりゆうという言葉があります。師に背いて自らを立てるといのではない。あくまでも、法然上人の教えの真の意義を顕あきかにするという意味で、『教行信証』をおりになつた。

法然上人が亡くなられてから、勢観せいかん房源智ぼうげんちという随従ずいじゆう昵近じつきんの弟子が、法然上人の命日に、智恩講というものを勤めた。それは、法然上人が亡くなられてすぐのことです。覚如上人は、その

ことに一つは思いを寄せられたのだと思います。勢観房源智の場合は、知恩院の知恩ですね。知ると恩で、知恩講。それに対して覚如上人は、報恩講と名付けられた。

その御恩を報ずるということは、まず三つの徳というものを、我々が顕かに自分のこととしてただかねばならない。それは真宗の興行の徳だと云われる。興行というと今は、演芸の方で興行ということを使われておりますけれども、そうではなくて、浄土真宗という宗を興されたという事、それが興行です。

それから二番目には、本願相應の徳。それは、本願と別の意味で浄土真宗があるということでは絶対にならないのであって、阿弥陀如来の本願に相應して、我々が信心をはっきりさせていただくという意味において、本願相應の徳、その模範を示されたのが、親鸞聖人である。ですから、『教行信証』には『教巻』、『行巻』の後に、『信巻』、『証巻』、『真仏土巻』、『化身土巻』という四巻がある。『教』、『行』の二巻は、伝承の巻。これは、釈尊から七高僧に至るまで、ずっと長い間の教えがこのように伝承されてきました、伝えられて私の所まで来ました、ということを顕して、その結びに、『正信偈』を作っておられる。それで『教行信証』は終わっているのではなくて、その行の徳というもの、南無阿弥陀仏の徳によって、信心を我々がはっきりさせて頂く。その南無阿弥陀仏の徳というのは、つまり、本願の徳です。すべての人を、南無阿弥陀仏という言葉の用きで救い取りたいという、この徳を私一人がためといたたく。ここところがなかなか難しい

です。ね。

聖人のつねのおおせには、「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。されば、そくばくの業をもちける身にてありけるを、たすけんとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよ」いままた案ずるに、善導の、「自身はこれ現に罪惡生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ」（散善義）という金言に、すこしもたがわせおわしませず。されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪惡のふかきほどをもしろず、如来の御恩のたかきことをもしろずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり。まことに如来の御恩ということばさたなくして、われもひとも、よしあしということのみもうしあえり。

聖人のおおせには、「善惡のふたつ総じてもって存知せざるなり。そのゆえは、如来の御ころによしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、よきをしりたるにてもあらめ、如来のあしとおぼしめすほどにしりとおしたらばこそ、あしさをしりたるにてもあらめど、煩惱具足の凡夫、火宅無常の世界は、よろずのこと、みなもって、そらごとたわごと、まことあることなきに、ただ念仏のみぞまことにておわします」とこそおおせはそうらいしか。

親鸞聖人が御述懐されたということを、唯円大徳が伝えられております。御述懐ということは、常の仰せというようなことで、公式の席上で、人に聴かせるというような場所で云われたのとは違って、独り言のようにして、いつも云っておられた。「弥陀の五劫思惟の願をよくよく案ずれば、ひとえに親鸞一人がためなりけり。」、私のようなものの為に本願を興されたのである。「されば、そくばくの業を」、そくばくとは、多くのという意味でしょう。多くの業の果で苦しんでいると。「そくばくの業をもちける身にてありけるを」、私はそういう身でありますと。その身を救済しようとおぼしめしたちける本願のかたじけなさよと、頂いておられる。

私たちはそこまで私一人がためなりと、こういただいているかというと、必ずしもそうでないことが多い。教義として説明することは出来ても、私一人がためなりけりと、深くいただくことはなかなか難しいです。

それを唯円大徳が、「いままた案ずるに、善導の、『自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ』（散善義『聖典』二一五頁し一五）という金言に、すこしもたがわせおわしまさず。」、機の深信に一つもそぐわないのだと。親鸞一人がためということは、私のような罪悪の深い、つまり、仏の教えられている法に背いている私だということを深く知らせて頂いて、本願を唯一の依り処として生きるとい

うことを、親鸞聖人がお示し下さった。こう唯円大徳は受け止めておられますね。私は非常に大事なことだと思います。『歎異抄』後序のお言葉です。ちよつと開けてみて下さい。六四〇頁です。「聖人のつねのおおせには、」というのは、七行目です。その後、「善導の、『自身はこれ現に罪悪生死の凡夫、曠劫よりこのかた、つねにしずみ、つねに流転して、出離の縁あることなき身としれ』（散善義）」という金言に、すこしもたがわせおわしませず。」。

つまり、機の深信というものを徹底しておられるからこそ、この五劫思惟の本願はひとえに親鸞一人がためなりけりといただかれたのだと、こういう具合に見ておられる。

そして、唯円大徳は、「されば、かたじけなく、わが御身にひきかけて、われらが、身の罪悪のふかきほどをもしらず、如来の御恩のたかきことをもしらずしてまよえるを、おもいしらせんがためにてそうらいけり。」親鸞聖人は、何も人に教えるために云われたわけではない。自分一人がためなりと歎かれたことを聞いていた唯円大徳が、我々が本願の深い意味を知らずして迷っていることを知らせるために云って下さったのだと、こういう具合に受け止められた。そこに、教えようとして云われたことではないけれども、それが深い教えとして唯円大徳に受けとめられて、そして、今日我々が、『歎異抄』のお言葉として、それを頂いている。

親鸞一人がためなりけりということは、私一人がためなりと、自分が受け止めているかどうかの問題なのです。それは、「他力というは、如来の本願力なり。」と、いつも本願力を受けて、

私は目覚めて生かしていただいているということですよ。

私が本山に勤めておりましたわずか三、四年の間に、高倉会館で法話をしてくれということが、何回かありました。私はその時の題に、「覚めて生きる」という題にした。覚めてというのは、自覚の覚の字です。「覚めて生きる」という題で話をしたら、私の次の週の日曜講演の人がそれを誤解して、「冷めて生きる」、熱いものが冷めるといふ、冷えるといふふうにも誤解して、私を批判された。私はその話を後ろで聞いていて、覚めて生きるというのは、覚の字だということを、はっきり強調しなくてはいけなかったのだと思います。覚めるといふのは、冷やし中華の冷めるではありませんよ。目覚めて生きる。今まで目覚めなかった、つまり、煩惱生活をしていた私、本願力によつて目覚めて生きる生き方が始まったということ、信心を得るといふことはそういうことです。覚めて生きるということは、そういう意味なのだということを、改めて自分に思わせていただいた。保温していたものが冷めるといふ意味ではないのです。そこにあくまでも冷静な心を取り戻して、つまらない煩惱のことで興奮していたものが、浄土を願うといふ心を起こさせて頂く。その背景に選択本願ということがある、選択とは、仏の力で選ばれたということですよ。我々で選ぶ力はないのです。我々は煩惱のものを選択するのですから、仏の智慧で本願を選ぶというような深いことは、我々凡夫にできない。ところが、できない我々に対して、本願を選んで、これによつてたすけていただくのだということをお頭にされた。その選択本願が、浄土真

宗である。

定散二善というのは、我々が自分の力で感情を統一したり、あるいは、意志を統一したりして、自分の心を平静にして、浄土を心に思い浮かべるといふ教えもあるけれども、それは『観経』の表に説かれている教えであつて、それはあくまでも方便である。問題は、感情も意志も統一できない、自分の力では統一できない、愚かなものであるといふことを深く知つて、本願を唯一の依り処として生かしていただくことが、これが選択本願といふことです。そのもとは、如来の本願であるといふことを、顕かにして下さつた。選択本願は、浄土真宗であると云われたのは、そういう意味であります。

予定された時間がまいりました。ご質疑なり、ご意見がありましたら、引き続き承ります。

〈座談〉

(司会) 先生、有り難うございました。非常に大事なお話を、分かりやすくいただいたと思います。

皆さんの中にも、親鸞聖人や真宗のこと、選択本願のこと、いろいろ資料なども巷に大変出回っておりますので、気に入ったものを買って、読んでみたり、勉強されている方もいらっしゃると思います。是非この機会に、先生にこんなこと聞いてみたいということがありましたら、遠慮なく手を挙げていただけますか。

(小島) 先生、今日は有り難うございました。私は、機、機法一体とか、機の深信とかに使われる機、それがどうもはつきり分からないのです。機というのは、我が身、生身のこの我が身とか、煩惱欲望を抱えているわが身ということではよろしいのでしょうか。

(先生) はい、そうです。ただ、その機と法ということは、真宗の独特の用語でございまして、法というのは、我々を助ける御法という意味であります。それに対して、それを私の一人のためと受けとめさせていただくのが、機の自覚であります。その機の深信ということ、中国の善導大師が教えて下さった。それは、罪悪深重の凡夫であるということ。それは、何も国家の法に背いて、刑事的な罪を作っているというのとは、全然違うのです。それは、法の道理に背いた、我執と煩惱で生きておる私ということです。罪を作つて生

きている。罪を作つて生きていくというと、仏に背を向けて生きていく私だということに自覚させていただく。先程申し上げた、覚めて生きるということは、そういうことでございます。決して、冷えるという意味ではありません。自覚をする。罪悪生死の凡夫ということが、なかなか得難いわけです。なんか自分を悪く思わなくてはならない。劣等感というものと混同してしまう。機の深信は、劣等感ではありません。また、優越感ではありません。これは、私自身の現実を知らせていただくということで、機の深信と深く信ずると、こう真宗の特別の言葉として教えられているわけでありす。以上です。わかりました。どうも有り難うございました。

(小島) 有り難うございました。続けてお一人いらつしゃいますね、どうぞ。

(松村) 今、原発のこととか、政治とか、外交のこととかで、いつも心の底のところ不安があるのですけれど、それは、本当に信心をいただいて、覚めて生きるということが出来れば、そういう不安というのはなくなるものなのではないでしょうか。

(先生) 聴聞することによって、自分が翻るということです。回心ということが大事なことです。回心ということは、今まで常識的に自我と煩惱を中心にして、うまく生きるということしか考えてなかつたものが、如来の本願を依り処として、浄土を願う精神生活をさせていただくということに領ける。心が翻るということです。それが、回向によって出

来る。如来の回向、お力によってそれが出来る。ですから、一生涯に必ず一度、回心するということが大事なことだということが、『歎異抄』に書かれております。反省と回心とは違うのです。反省は、こんなことはもう二度としないと云って反省するのが、普通の反省ですが、回心というのは、今までの生き方が引っくり返って、本願によって浄土を願う人間にさせていただくということが回心ということだと、こういうことでございます。以上です。

(淡海)

先生、有り難うございました。今日、浄土真宗を立教開宗されたということで、『教行信証』を親鸞聖人が著わされたというお話を伺いました。『教行信証』を少し読ませていただいている中で、わからないことがございまして、お聞きしたいのですが。

『教行信証』の中の、二四二頁の一番最後の行に、「『心』は即ち慮知なり。」という言葉がございませぬ。心、こころはすなわち慮知なり。

私は、この言葉がとても気になっていて、勝手に自分では、この心というのは、私たちの心というのは、慮知ということが、いわゆる思慮分別することだと思つたので、私の心は即ちすぐく思慮分別するように思つたのです。機の深信的な見方で、私に対していつているように思つたのです。よく読んでみれば、この心は菩提心をいつているといふことになりましたよ。そうしますと、菩提心、すなわちそれが慮知なりと、どうして

そういうふうを考えればよいのか、よくわからないのですけれど。

(先生) これは、聖道門の『摩訶止観』の中から使っているのでありまして、親鸞聖人がここに引用された意味は、慮知というのは、親鸞聖人の引用されたお心をいただく、我が身を本願の用きはたらによって深く深く知らせていただく。こういうことだと私は思わせていただく。私はこういうものなのだというような、こういう自分の常識的判断ではなくてですね、菩提心ということは、私が仏の教えによって、成仏する道を求める求道者であるということはたらを深く知らせていただく。

(淡海) そうしますと、今お話を伺った、本願力の回向を受けているようなところにとればいいのですね。

(先生) そうですね。そういうふう引用されているということです。

(淡海) この文章が、前後の段落のところ急に急に入ってきているわけですね。難しいです。

(先生) 『教行信証』は難しいです。それは、後の方とも関係があるのですね。横超断四流という。横超断四流というのは、横様はたらにというのは、自力に対して他力をあらわすのが、横様はたらにということはたらです。欲・有・見・無明という四つの迷いを乗り越えさせていただくことが、これが横超断四流ということはたらです。それに導かれる意味において、『涅槃経』(二四四頁L一〇)を入れていらっしやる。深く深く自分を知らせていただくというこ

とを、慮知（二四二頁上 一六）ということだと、私は了解しております。

（淡海） そうですか、有り難うございました。ちょっと引つかかっていたので、お聞きしたいと思っております。

（先生） 菩提心を起こすということは、自力で菩提心を起こすということは、なかなか難しい。法然上人と明恵上人の菩提心の理解も違いますよね。

（先生） 如来の本願力によって、初めて自分は成仏する身にさせていただく。成仏するという意味において、この世に言葉のわかる人間として、生まれさせていただいたのだということに気が付かせてもらおう。そういうことでしょうか。そこまで来るのは、なかなか容易ではないということです。

（淡海） 有り難うございます。そうですね、自分の力ではどうにもなりません。この我が身は、本当に。

（先生） 南無阿弥陀仏によって、そのことに気が付かせていただく。こういうことでございます。

（岡田） 先生、今日のご法話、有り難く聞かせていただきました。私のような愚禿の凡夫が、先生をはじめ、多くの方々にお育てをいただきました。今現在があると、それも他力で感じさせていただいております。先程からお話が出ております、善導大師の機の深信です。

けれど、これは、深く深く我を見るところだと、私は感じておりますけれど、その感じさせていたたくものも、如来様から賜ったものだと感じております。

(先生)

如来の回向によって、今まで全く気付かなかった機の深信が、自分の上にできた。これはもう少しもとにかえってお話し申しますと、『観経』に三心ということがあります。至誠心、深心、回向発願心という、三つの心というものが、『観経』に出てくるのですが、それについて釈尊は、何も詳しく説明はしておられないわけです。三つの心があると。至誠とは、誠の至誠ですね。それから深心とは深い心。回向発願心とは、発願を起す心と、こういう具合に、ただそれだけ三つを挙げただけで、その意味を述べておられないわけです、『観経』では。ところが、その意味はこういう意味なのだということ、善導大師が、今から千何百年前に、顕かにして下さったのが、『観経』の三心釈というものです。三心釈というのは、釈尊が説明も何もしておられない三つの心ということについて、ご自分の了解を述べられた。その中に、深心という、深い心というのは、深く信ずる心だと、こういう具合に云っておられる。そこところが大事なことです。深い心とは、一体どういうことなのか、非常に抽象的でわかりにくい。ところが善導大師は、深く信ずる心だと。つまりそれは、機の深信と法の深信というものに分けられる。もっと詳しく云うと、七深信ということになるが、そのことで大事なのが、第一

の機の深信と、第二の法の深信である。機の深信というのは、自身を深信する。自分を深く知るということ。それは、『愚禿鈔』の中にそう書いてある（四四〇頁―四）。自身を深信する。自分を高く評価して、人に認めさせるようなことを長い間してきた自分、あるいは、自分を正当化することだけに一生懸命になっていた自分というものが、仏法の鏡に照らされて、仏の教えに顕かにせられた法の用きに背いていた私であると。つまり、我執と煩惱の生活しかしてこなかった私だということ、もう少し言葉を変えて云うならば、迷いの世界しか知らなかった私であると、こういうことを深く自覚させていただく。

それで、「常に没し」というのは、何か水没するような具合に、空中にあったものが水の中に沈むというような具合に、文字を見ればそのように見えるのですけれども、『涅槃経』を見ますと、そういう意味ではなくて、三種の水中動物という喩が、『涅槃経』の中にあります。

一つは、水の中で生まれて、水の中で死んでしまう、水上の世界は全く知らない、普通の魚。もう一つは、トビウオのように、ちょっとだけ瞬間的に、空中に跳び上がって、水の上の世界が見える魚。それからもう一つは、カメですね。ウミガメは、卵を産むために浜に上がってくる。ウミガメのように、海の中でも暮らせるが、空気中でも暮らせ

る、そういう三種の水中動物がいる。

その「没し」というのは、海の中で生まれて、海の中で死んでしまう、海の中しか知らない動物という意味で、喩えてあるわけです。「常に没し」というのは、迷いの世界に生まれて、迷いの世界しか知らずに死んでしまう私だったということを、「常に没し」という具合に述べておられるわけです。

そこを善導大師は、『涅槃経』教学の大家ですから、『涅槃経』の心をよく受けとめて、機の深信の言葉が出てくるのでしょう。「自身は現にこれ罪悪生死の凡夫、曠劫より已来、常に没し常に流転して、出離の縁あることなし」、永い過去の迷いの前の世界から出るきつかけを、今までつかんでいない私だということに気が付かせていただく。そういうことが、信心の基本であるということを顕かにして下さった。以上です。

(岡田) 本当に機の深信が有り難いです。

(先生) そうですね。そういうことを教えて下さる教えというのは、あまりないのです。浄土系の教え、善導大師の流れを汲んでいる教えにしかないのです。

(岡田) 世の中が変わって見えるようになりますものね。有り難うございました。

(司会) 先生、色々と深い話を分かり易くお話し下さって、私も大変勉強になりました。これをもちましてお時間ですので、今日の報恩講が終了となります。

(住職) 最後はまだ五分あるから、川澄さんがまた去年のように質問をする。また私と掛け合

いになるようにやって下さい。

(司会) 私もあまり勉強していませんので…。今年の春に、推進委員の勉強会に、京都の

本廟へ行きまして受けたのですが、その時に、一番最後に云われたことが、心の中に親鸞聖人を持ちなさいというふうに云われたのです。これは、南無阿弥陀仏を、他力本願を信じて、今日もいい天気になりましたけれど、最近旅行なんかでもいい天気に恵まれるし、台風の間を縫ってですね、それは偶然かもしれないけれども、すぐく気持ちが、私ずつと幹事をやっているものですから、いつも心配していたのですが、割合、大変気が楽になったのですね。だからまだ持ちきれないのですが、そういう心掛けをしていきたいなというふうに…、

(住職) 親鸞聖人を心に持っている、いつも晴れるというのは、ちよつといかがなものかと。

(司会) そういう気持ちを持つと、非常に私の役柄も楽に感じるし、必要以上に心配しないで済むようになってきたので、これからも、だんだんそういうようにしていきたいなと思っております。

(住職) わかった。清沢満之と同じだよ。念仏を忘れるとね、妄念が出たとか、念仏をすると、

わが世が開けるとかってね、同じだ。親鸞聖人をしつかり心に保てば、空は曇っていて

も晴れる。親鸞聖人を保つことを忘れれば、晴れていても曇る。

(司会) 一緒に行った、谷口さん、平山さん、藤原さん、私と同じように感じていませんか。

独りだけでなくて、何人かで本廟に行ったりして、勉強してくると色々話し合えるので、とてもいいですね、先生。

(任職) 誓いの言葉は実行していますか。痛いでしょう。

(司会) それでは、お時間になります。先生、有り難うございました。

あとがき

本書は平成二五年十月二十七日、第二十三回報恩講における櫛暁先生のご法話の記録です。

昨年、櫛先生は胆嚢摘出手術をされ、九月の会座には復帰され、十月の報恩講へご出講いただいたことです。本年（H26）一月に心筋梗塞で入院され、その後、カテーテルの手術を受けられて、鹿児島のご自坊にてご静養されております。そのような事情より、本年の毎月の会座は休講となりました。先生のお話を聞くという機会は有り得べきことであつたことを痛感しております。そういう思いで昨年の講話を読み返しておりました。

本書の中で、先生は、「行事として、いつもと違ったお勤めをし、いつもと違ったお飾りをしてお勤めをすれば、それで報恩講は終わったというのではなくて、我々一人一人が、親鸞聖人の教えによって、道を求め、信心をはっきりした求道者にならせていただく。そして生きている間、信心が深化していく。深まっていく。もう私はわかった、これで終わり、何も云うことはない、そういうところに停止しないで、何も云うことはないのだけれど、その深い意味が、深まって領けていくというところに、私たちの一生の意味があると思うのです。」とお話下さっています。

私達はこれでもうよいと腰を下ろしてしまいがちですが、一生涯をかけて経典や教えの意味を尋ね深めていくことの大切さを教えていただきました。

先生にはご静養中のところ、原稿に目を通して頂き校正賜りましたこと、この場を借りて厚く御礼申し上げます。

ご法話のテープを原稿に起こして下さいました、護持会役員の淡海雅子様、校正を手伝ってくれた元役僧伊東良英氏に感謝申し上げます。

合掌

平成二六年十月二十六日

第二十四回報恩講にあたり

光照寺 副住職 池田孝三郎